随伴性自尊感情が出来事および他者に対する評価へ及ぼす効果

Effects of contingent self-esteem upon the cognitive appraisal both for the positive and negative events and for others

小池陽子・宮本正一
（岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部）
KOIKE Yoko and MIYAMOTO Masakazu
(Graduate School of Education, Gifu University ; Gifu University)

本研究では，随伴性自尊感情が出来事および他者に対する認知的評価へと及ぼす影響について検討した。場面想定法を用いた質問紙調査の結果，随伴性自尊感情が高い者は，随伴性自尊感情が低い者に比べて，ポジティブな出来事をよりポジティブに，ネガティブな出来事をよりネガティブに評価し，出来事が自身に及ぼす影響をより大きく認知していた。一方で，出来事に登場する他者への評価では，ポジティブな出来事において，随伴性自尊感情が高い者の方が相手に対する親しみやすさを高く評価していたが，それ以外は群間で有意な差がみられなかった。よって，随伴性自尊感情の高さは出来事の評価に影響を及ぼすが，他者への評価には明確な影響を及ぼさない可能性が示唆された。最後に，本研究の問題点および随伴性自尊感情に関する研究の展望について述べた。

キーワード：随伴性自尊感情　認知的評価

自尊感情（self-esteem）とは，個人が持つ自己に対する肯定的評価（Baumeister, Smart, & Boden, 1996）であり，我々の精神的健康と関連がみられるとして古くから注目されてきた。近年では，単純に自尊感情の高さのみを研究の対象とするのではなく，自尊感情をより細分化してとらえ直そうとする動きが活発になっている。中でもKernis（2003）は，従来の自尊感情という概念には二つの側面が含まれていると指摘している。一つめは自分自身に対する本質的な満足であり，比較的安定している肯定的評価という側面である。二つめは基準や期待に合致することによって得られる肯定的評価という側面である。前者は真の自尊感情（True self-esteem），後者は随伴性自尊感情（Contingent self-esteem）とされている。Kernis（2003）によると，随伴性自尊感情が高い者にとって，課題の達成や他者からの評価などに関連する出来事は脅威となりやすく，自尊感情が不安定になる。つまり，随伴性自尊感情とは，容易に脅威にさらされる脆弱な自尊感情であると考えられる。

Vonk & Smit（2012）は，随伴性自尊感情が他者から承認されているかどうか，自分の外見が魅力的であるかどうか，課題を達成できたかどうかといった側面と関連していることを示した上で，そのような外的な要因に自尊感情を随伴させる者は，それが脅かされる事態に陥った場合，その事態に対して敵意をもった反応をしやすく，ネガティブな感情を感じやすいということを示した。また，Zeigler-Hill, Besser, & King（2011）は，課題に失敗する場面や他者から拒否される場面を呈示し，随伴性自尊感情の高さとその出来事後に感じる感情状態との関連を検討した。その結果，随伴性自尊感情が高い者ほど，それらの出来事の後に自尊感情が低下しネガティブな感情が高まることがわかった。さらに，Kernis（2006）によると，随伴性自尊感情が高い者は，価値を侮辱されると容易に脅威にさらされ，その脅威を特に怒りや敵意を生じさせることで処理していることがわかっている。以上の結果は，随伴性自尊感情が高い者は，

自尊感情が不安定であり，出来事が脅威となりやすいというKernis（2003）の見解を支持するものと考えられる。

しかし，これまでの研究では，随伴性自尊感情の高さと認知との関連は検証されてきていない。では，随伴性自尊感情が高い者は出来事をどのようにとらえているのであろうか。

加藤（2001）によると，対人関係に関する出来事に対して脅威であると判断すると，ネガティブ関係コーピング（友人づきあいをしないようにする，無視する等）を使用しやすい。そして，ネガティブ関係コーピングを用いた場合，心理的なストレス反応が高まることが示された。さらに，鈴木・坂野（1998）では，対人関係のストレス場面においては，脅威性の評価と問題を回避する対処方略（放棄・諦め，責任転嫁が含まれる）および抑うつや不安，怒り，無気力といったストレス反応との間に正の関連がみられた。随伴性自尊感情が高い者は，他者からネガティブな評価を与えられた際に怒りや敵意を感じる傾向があることやネガティブな感情状態に陥りやすいことが示されていることから，他者からネガティブな評価を受けるといった対人場面ではその出来事自体を否定的にとらえると考えられる。一方で，Kernis（2003）では，随伴性自尊感情が高い者にとって成功体験は自尊感情の維持，高揚のために積極的に追い求められる体験であるとされている。よって，他者からポジティブな評価を得るといった対人場面では，その出来事を肯定的に認知しやすいと考えられる。つまり，随伴性自尊感情が高い者は，随伴性自尊感情が低い者と比べて，ネガティブな出来事をよりネガティブに，ポジティブな出来事をよりポジティブにとらえることが予想される。

また中間・小塩（2007）によると，自尊感情が不安定な者は出来事から受ける影響をより大きく認知することが明らかになっており，自尊感情が不安定であることと経験している出来事の内容との間には関連がみられない（Greener, Kernis, Waschull, Berry, Herlocker & Abend, 1999）という。ここから，自尊感情が不安定であると考えられている随伴性自尊感情が高い者も，出来事の肯定性に関係なく，出来事が自身に及ぼす影響を高く認知すると推測される。

加えて，中間・小塩（2007）では，自尊感情が不安定な者は出来事の肯定性の評価が極端に揺れ動くことも示されている。そのため，随伴性自尊感情が高い者においても出来事の評価に揺れ動きがみられると予想できる。

さらに，随伴性自尊感情が高い者は，自尊感情が脅威にさらされた際に他者に対して敵意や怒りを向ける傾向があることが示されている。他者へ怒りや敵意を表出することに関しては，臨床場面においても取り上げられることがある。そして，その傾向は特に自己愛傾向を有する者の特徴的な傾向であると考えられる。小塩（1998）によると，自尊感情は自己に対する肯定的な評価であるという点で自己愛との関連が示唆されている。小塩（2001）では，自己愛傾向の特徴である注目・賞賛欲求（他者からの注目や賞賛を求める傾向）の高い者は自己像が不安定であり，それが自尊感情の不安定さに影響していることが明らかとなった。また，伊藤・川崎・小玉（2011）では，随伴性自尊感情と優越感とに正の関連がみられることがわかった。ここから，他者との比較を通して自己評価を高めることや他者からの評価に関する敏感さを特徴とする自己愛傾向と，基準や期待を満たすことで得られる自尊感情である随伴性自尊感情が，不安定な自己評価という点で共通していると考えられる。

不安定な自己評価と攻撃性との関連を示したモデルに，自己本位性脅威モデルがある。このモデルによると，不安定な自己評価を有する者は，自己の肯定的な評価を維持するために外的評価に過敏にならざるを得ず，ゆえに外的評価が強い脅威となる。そして，ネガティブな評価を受けるなど自己評価と外的評価との不一致を認識させられる状況に遭遇した場合，他者を卑下したり，敵意や怒りを表出したりするといった対処方略をとる。このように考えると，随伴性自尊感情が高い者はネガティブな出来事を経験した後に自尊感情が低下するため，低下した自尊感情を保障するために他者の価値下げを行う可能性がある。つまり随伴性自尊感情が高い者は随伴性自尊感情が低い者と比べて，自身に

ネガティブな評価を与えた他者をより否定的に認知することが予想される。他方，随伴性自尊感情が高い者にとって，ポジティブな出来事は自尊感情を維持・高揚させる体験であることから，そのような評価を与えた他者に対してはポジティブな認知を行うのではないだろうか。よって，随伴性自尊感情が高い者は随伴性自尊感情が低い者と比べて，他者に対する評価が揺れ動きやすいということも考えられる。

以上より本研究では日本において十分な検討がなされていない随伴性自尊感情が出来事および他者に対する認知的評価に与える影響に焦点を当て検討する。

仮　説

まず出来事の肯定性および脅威性，そして影響性の評価について以下の仮説を立てた。

①随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，ポジティブな出来事をよりポジティブに，ネガティブな出来事をよりネガティブに評価する。

②随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，出来事による影響性を高く評価する。

③随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，出来事に対する認知的評価が揺れ動く。

また，他者への評価について以下の仮説を立てた。

④随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，ポジティブな出来事においては他者をよりポジティブに評価し，ネガティブな出来事においては他者をよりネガティブに評価する。

⑤随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，他者に対する認知的評価が揺れ動く。

方　法

予備調査

調査参加者

大学生28名（男性13名，女性15名，平均年齢21.04歳）

調査時期

2012年11月下旬

手続きおよび結果

本調査では場面想定法を用いるため，大学生が日常生活において経験し得る出来事を自由記述形式にて調査した。阿部（2009）による出来事経験の分類を参考に，他者とのポジティブな出来事およびネガティブな出来事について，それぞれ「あなたは，他者から“好意を示された（褒められた）”・“必要とされた”と感じた経験をしたことがありますか」，「あなたは，他者から“嫌な態度をとられた”・“けなされた”と感じた経験をしたことがありますか」と尋ねた。経験の有無について回答を求めた後，差支えなければその内容について簡潔に記述するように教示した。さらに，他者と調査参加者との関係がわかるよう，その他者とは誰なのかを匿名(友人，母親など)で記入してもらった。

得られた回答をまとめ，複数の評定者によってポジティブまたはネガティブと評価され，かつ経験頻度が高いとみなされた6つの出来事を本調査で用いることにした（Appendix）。なお，相互作用の相手を友人とする回答が最も多かったため，本調査においては相手を友人に設定することにした。

本調査

調査参加者

大学生274名（男性129名，女性139名，不明6名）

調査時期

2013年5月下旬から6月上旬

手続き

質問紙調査を実施した。予備調査にて選出した6つの出来事を用い，場面想定法による調査を行った。「この出来事を経験した後，あなたはこの出来事（他者）についてどのように思いますか」と教示し，各出来事およびその出来事に登場する他者について評価をするよう求めた。

出来事の評価に関する項目には，中間・小塩（2007）を参考に，肯定性の評価として「良い—悪い」・「快い—不快な」という形容詞対を用いることにした。また，鈴木・坂野（1998）および加藤（2001）を参考に，出来事の脅威性に関する評価として「不安な—安心な」・「危機である—好機である」，出来事が自身に及ぼす影響性に関する評価として「影響がある—影響がない」・「重要である—重要でない」という項目をそれ

ぞれ設定した。評定は「非常に」,「かなり」,「やや」の６件法で行った。

他者に対する評価には林（1978）の対人認知尺度を用いた。対人認知尺度は個人的親しみやすさ，社会的望ましさ，力本性の3因子から構成されていた。そこで大橋・林・廣岡（1983）の因子負荷量を参考に，各因子に負荷の高かった３項目ずつ計９項目を用いた。その結果，個人的親しみやすさ因子は“感じのよい”,“人のよい”,“親切な”，社会的望ましさ因子は“慎重な”,“重厚な”,“分別のある”，力本性因子は“積極的な”,“自信のある”,“意欲的な”となった。評定は「非常に」,「かなり」,「やや」の６件法で行った。

最後に，随伴性自尊感情の測定を行った。１因子15項目からなる随伴性自尊感情尺度（伊藤・小玉，2006）を用いた。なお随伴性自尊感情尺度には「自己価値の感覚」という馴染みのない言葉が使用されていたため，大谷・中谷（2011）を参考に「自分が価値のある存在であるという感覚」という言葉に修正し使用した。各項目について，１（あてはまらない）から５（あてはまる）までの５件法で回答を求めた。

結　果

得点の整理

随伴性自尊感情について

伊藤・小玉（2006）にならい，随伴性自尊感情尺度15項目について主成分分析を行った。その結果,「他人から自分の外見を誉められると，自分自身を価値ある存在だと感じる」および「誰かが自分に好意を抱いていることを知ったとしても，そのことが自分自身に対する感情に影響することはない」という項目の第１主成分への負荷が低かった。そのため，それらを除き全13項目で主成分分析を行ったところ，全ての項目が.30以上で第１主成分に負荷していた。また，固有値は第１主成分から4.02，1.69，1.44…となっており，第１主成分，第２主成分の間に最も大きな減衰がみられた。そこで，先行研究と同様に，本研究においても随伴性自尊感情を１因子構造であると判断することにした。信頼性係数を算出したところ，α=.81であり，十分な内的一貫性を有していた。そこで，全13項目の合計得点を算出し，これを随伴性自尊感情得点とした。随伴性自尊感情得点の平均値は45.52（*SD*=7.30）であった。

随伴性自尊感情得点の高さによって出来事および他者の認知が異なるのかどうかを検証するため，随伴性自尊感情得点の高さで調査参加者を２群に分けた。全体の随伴性自尊感情得点の平均値よりも個人の随伴性自尊感情得点が上回る場合を「随伴性自尊感情高群」，得点が下回る場合を「随伴性自尊感情低群」とした。その結果，随伴性自尊感情高群の平均得点は51.18（*SD*=4.13，*N*=119），随伴性自尊感情低群の平均得点は39.62（*SD*=4.78，*N*=114）となった。

出来事評価得点について

出来事に対する認知的評価を測定した６項目を１～６点で得点化した。そして，得点が高くなる程,“快い”,“良い”,“危機である”,“不安な”,“影響がある”,“重要である”と評価していると解釈できるように値を換算した。続いて,“快い”,“良い”の平均値を算出した。これを出来事に対する「肯定性」の評価得点とした。また,“危機である”,“不安な”の平均値を算出し，出来事に対する「脅威性」の評価得点とした。さらに,“影響がある”,“重要である”の平均値を算出し，出来事に対する「影響性」の評価得点とした。

対人認知得点について

出来事評価と同様に，対人認知に関する９項目についても１～６点で得点化した。得点が高くなる程,“感じのよい”,“人のよい”,“親切な”,“慎重な”,“重厚な”,“分別のある”,“積極的な”,“自信のある”,“意欲的な”と評価していると解釈できるように値を換算した。続いて，９項目のうち，個人的親しみやすさを評価している“感じのよい”,“人のよい”,“親切な”の平均値を算出し「個人的親しみやすさ得点」とした。また，社会的望ましさを評価している“慎重な”,“重厚な”,“分別のある”の平均値を算出し,「社会的望ましさ得点」とした。さらに，力本性を評価している“積極的な”,“自信のある”,“意欲的な”の平均値を算出し,「力本性得点」とした。

評価の揺れ動きについて

本研究では，出来事および他者に対する認知的評価の揺れ動きを問題とするため，中間・小塩（2007）を参考に得点処理を行った。出来事および他者に対する評価は，いずれも１～６点の６件法で測定されているが，評価得点が１または６の場合を３点，２または５の場合を２点，３または４の場合を１点として得点化し直した。つまり，３点に近い値をとるほど評価が極端であると解釈できる。そして，全ての出来事における各評価の揺れ動き得点の平均値を算出し，個人の「評価の揺れ動き得点」とした。

随伴性自尊感情の高さと認知的評価との関連

随伴性自尊感情と出来事の認知的評価

随伴性自尊感情の高さと出来事の認知的評価との関連を調べるため，各出来事をポジティブなものとネガティブなものに分け，その評価得点の平均値を調査協力者ごとに算出した。そして，随伴性自尊感情の高群，低群で差がみられるかどうかを検討した。その結果，ポジティブな出来事においては，肯定性（$t(231)=2.21$, $p<.05$），脅威性（$t(231)=2.11$, $p<.05$），影響性（$t(231)=4.13$, $p<.01$）において，群間で有意な差がみられた（表１）。すなわち，随伴性自尊感情が高い者の方が出来事をより肯定的に，かつ脅威性が低いととらえ，出来事が自身に及ぼす影響を大きく評価していることがわかった。また，ネガティブな出来事においては，肯定性（$t(231)=3.36$, $p<.01$），脅威性（$t(231)=4.94$, $p<.01$），影響性（$t(231)=4.80$, $p<.01$）において，群間で有意な差がみられた（表１）。すなわち，随伴性自尊感情が高い者の方が出来事をより否定的に，かつ脅威性が高いととらえ，出来事が自身に及ぼす影響を大きく評価していた。

随伴性自尊感情と対人認知

随伴性自尊感情の高さと対人認知との関連を調べるため，各出来事の他者に対する対人認知得点を随伴性自尊感情の群間で比較した。その結果，ポジティブな出来事においては，個人的親しみやすさ（$t(231)=2.25$, $p<.05$）において，群間で有意な差がみられた。つまり，随伴性自尊感情が高い者の方が，他者をより「人がよい」，「感じがよい」，「親切」ととらえていることが明らかとなった。一方で社会的望ましさおよび力本性については，群間で有意な差がみられなかった（表１）。また，ネガティブな出来事においては，力本性において有意傾向がみられた（$t(231)=1.77$, $p<.10$）のみで，個人的親しみやすさおよび社会的望ましさにおいては有意な差がみられなかった（表１）。よって，ネガティブな出来事を経験した後は，随伴性自尊感情が高い者の方が他者をより「積極的」，「自信がある」，「意欲的」ととらえる可能性があると考えられるが，随伴性自尊感情の高さが対人認知に与える影響はほぼみられなかったといえる。

随伴性自尊感情と評価の揺れ動き

随伴性自尊感情の高さが出来事評価の揺れ動きに影響を与えるのかを検討するため，随伴性自尊感情の高群・低群の評価の揺れ動き得点を比較した。その結果，出来事に対する評価であ

表１　各群の得点の平均値および標準偏差

出来事	評価次元	平均値(標準偏差) 高群	低群	t値
ポジティブな出来事	肯定性	5.14(0.56)	4.95(0.71)	2.21*
	影響性	4.67(0.66)	4.27(0.80)	4.13**
	脅威性	2.03(0.61)	2.22(0.74)	2.11*
	個人的親しみやすさ	4.84(0.61)	4.66(0.64)	2.25*
	社会的望ましさ	3.88(0.54)	3.82(0.55)	0.90
	力本性	4.40(0.49)	4.30(0.58)	1.44
ネガティブな出来事	肯定性	2.03(0.51)	2.29(0.63)	3.36**
	影響性	4.75(0.77)	4.22(0.92)	4.80**
	脅威性	5.07(0.50)	4.65(0.78)	4.94**
	個人的親しみやすさ	2.41(0.44)	2.52(0.59)	1.62
	社会的望ましさ	2.64(0.58)	2.71(0.59)	0.99
	力本性	3.54(0.58)	3.40(0.63)	1.77†

**<.01　，　*<.05　，　†<.10

る，肯定性（$t(231)=2.75$, $p<.01$），脅威性（$t(231)=3.06$, $p<.01$），影響性（$t(231)=3.39$, $p<.01$）の評価において，群間に有意な差が認められた（表２）。つまり，随伴性自尊感情の高い者は低い者よりも，出来事に対する評価が揺れ動きやすいことが示唆された。

他方，対人認知においては，個人的親しみやすさ（$t(231)=1.59$, *n.s.*），社会的望ましさ（$t(231)=0.36$, *n.s.*），力本性（$t(231)=0.37$, *n.s.*）のどの次元においても，有意な差は認められなかった（表２）。よって，随伴性自尊感情の高さは対人認知の揺れ動きに影響を与えないことが示された。

表２　各群の得点の平均値および標準偏差

評価次元	平均値(標準偏差) 高群	低群	t値
肯定性	2.10(0.45)	1.93(0.51)	2.75**
影響性	1.95(0.50)	1.73(0.51)	3.39**
脅威性	2.07(0.45)	1.88(0.50)	3.06**
個人的親しみやすさ	1.82(0.45)	1.73(0.44)	1.59
社会的望ましさ	1.48(0.38)	1.47(0.37)	0.36
力本性	1.58(0.43)	1.56(0.42)	0.37

**<.01

考　察

随伴性自尊感情と出来事の評価について

随伴性自尊感情と出来事に対する認知的評価との関連を検討した結果，ポジティブな出来事において随伴性自尊感情が高い者の方が随伴性自尊感情が低い者よりも，その出来事を「良い」・「快い」，また「好機である」・「安心な」出来事であるととらえていることが示された。つまり，基準や期待を満たすことで自尊感情を得ている者は他者から高評価を得るといった出来事に遭遇した際，出来事自体をよりポジティブに認知するということが明らかとなった。Kernis（2003）が指摘したように，随伴性自尊感情が高い者にとって他者から高評価を得るような体験は自尊感情を維持・高揚させることに繋がる体験であるため，出来事の評価がよりポジティブになったのではないかと考えられた。一方，ネガティブな出来事においては，随伴性自尊感情が高い者の方が随伴性自尊感情が低い者よりも，出来事を「悪い」・「不快な」，「危機である」・「不安な」出来事であるととらえていることが明らかとなった。よって，基準や期待を満たすことで自尊感情を得ている者は他者から否定的評価を得るといった出来事に遭遇した際，出来事自体をよりネガティブに認知するということが示された。随伴性自尊感情が高い者にとって，他者から否定的な評価を受ける体験は自尊感情を低下させることに繋がる体験である（Zeigler-Hill et al., 2011）。そのため，出来事の肯定性を低く，脅威性を高く認知すると考えられる。この結果は，随伴性自尊感情が高い者は自尊感情が脅かされる出来事を脅威と感じやすいというKernis（2003）の見解を支持する結果となった。

以上より，仮説①「随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，ポジティブな出来事をよりポジティブに，ネガティブな出来事をよりネガティブに評価する」は支持されたといえる。

続いて影響性の評価について検討する。影響性の評価に関しては，ポジティブな出来事，ネガティブな出来事にかかわらず，随伴性自尊感情が高い者は随伴性自尊感情が低い者よりも，出来事が自身に及ぼす影響性を大きく評価していた。これは中間・小塩（2007）が示した，出来事の内容に関係なく，自尊感情が揺れ動きやすい者は出来事が自身に及ぼす影響を大きく評価するという見解を支持する結果となった。よって仮説②「随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，出来事による影響性を高く評価する」も支持されたといえる。

このように，本研究では，ポジティブな出来事，ネガティブな出来事の両方において，随伴性自尊感情の程度が出来事の肯定性・脅威性・影響性の評価に影響を及ぼすことが示され，先行研究で述べられていた随伴性自尊感情の特徴を実証する結果が得られた。

随伴性自尊感情と対人認知について

まず，「個人的親しみやすさ」次元に関して検討する。個人的親しみやすさは，他者に対する好感や親和に関係した次元である。この次元は，対人認知において，他者に抱く感情を含み，評価的な色彩の濃い次元であるといえる　（林，1982）。よって，他者に対する肯定的感情，否定的感情が反映されやすい次元であると考えるこ

とができるだろう。

個人的親しみやすさ得点を群間で比較したところ，ポジティブな出来事においては随伴性自尊感情が高い者の方が随伴性自尊感情が低い者よりも，他者を「人のよい」・「感じのよい」・「親切な」人であるととらえていることが明らかとなった。よって，基準や期待を満たすことで自尊感情を得ている者は他者から高評価を得るといった出来事に遭遇した際に，その相手をより好意的にとらえると考えられる。一方で，ネガティブな出来事においては，個人的親しみやすさの評価得点に関して群間で差がみられなかった。池上（1993）によると，肯定的な自己感情を有している者，つまり，自尊感情が高い者においては，他者の印象を評定する際に，友好性を高く評価する傾向がある。しかし，否定的自己感情を有している者，つまり，劣等感が高い者においては，必ずしも他者の印象をネガティブに評価するわけではないということが示されている。これは，本研究で得られた結果と類似するものと思われる。つまり，自尊感情が高まるようなポジティブな出来事の後には，他者に対して好感を持ったり親しみを感じたりするといった肯定的評価が高くなるが，自尊感情が低くなるようなネガティブな出来事の後には，他者に対して否定的な認知を行うまでに至らないということが考えられる。

続いて，「社会的望ましさ」次元について検討する。社会的望ましさは，他者に対する尊敬や信頼に関係した次元であると考えられている。分析の結果，社会的望ましさ次元の評価得点に関しては，ポジティブな出来事およびネガティブな出来事のいずれにおいても，随伴性自尊感情が高い者と低い者との間に差が認められなかった。そのため，随伴性自尊感情の高さは他者への尊敬や信頼に関する認知に影響を及ぼさないことが示されたといえる。

最後に，「力本性」次元に関して検討する。力本性は，他者の活動性と意志の強さの評価に関係した次元である。まず，ポジティブな出来事においては，力本性の評価に関して随伴性自尊感情が高い者と低い者との間に有意な差がみられなかった。ネガティブな出来事においても同様に，有意な差がみられなかったが，有意傾向は認められた。ここから，基準や期待を満たすことで自尊感情を得ている者は，自身に否定的評価を与えた他者の活動性や意志の強さを高く認知する可能性があるということが示唆された。

以上より，仮説④「随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，ポジティブな出来事においては他者をよりポジティブに評価し，ネガティブな出来事においては他者をよりネガティブに評価する」は，一部支持されたにとどまったといえる。根本（1973）によると，自尊感情が高い者ほど，他者へ好意的感情を向け，他者から好意的感情が寄せられていると認知しやすい。また，自尊感情が低い者ほど，他者から嫌悪的感情を寄せられていると知覚しやすいが，他者に嫌悪的感情を向けることに関しては，自尊感情の高さにより違いがみられない。随伴性自尊感情が高い者は，ポジティブな出来事に遭遇した際に自尊感情が高まると考えられるため，それが他者を肯定的に認知することにつながっていると考えられる。一方で，随伴性自尊感情が高い者がネガティブな出来事に遭遇した場合，自尊感情が低下すると考えられるため，根本（1973）が示したように他者から嫌悪的な感情を寄せられていると認知しやすいことが予想される。よって，出来事によって自尊感情が低下した場合，他者が自己に向ける否定的な感情は大きく見積もるが，それが他者への認知的評価にまで影響を及ぼさないという可能性が考えられた。しかし，本研究の結果からは，随伴性自尊感情が高い者がネガティブな場面において他者からの評価をどのように認知しているのかについて明確な言及ができない。

随伴性自尊感情と評価の揺れ動きについて

随伴性自尊感情の高さと出来事の評価の揺れ動きとの関係について検討する。分析の結果，出来事の肯定性，脅威性，影響性に関する評価の揺れ動き得点において，いずれも随伴性自尊感情が高い者と低い者との間に有意な差が認められた。つまり，仮説③の「随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，出来事に対する認知的評価が揺れ動く」は支持されたといえる。

中間・小塩（2007）では，自尊感情が不安定な者は出来事に対する肯定性の評価が揺れ動きやすいことを明らかにしている。本研究で取り上げた随伴性自尊感情は不安定な自尊感情であることを前提としているため，中間・小塩（2007）の結果と同様の結果が得られたのだと考えられる。また，随伴性自尊感情が高い者の方が，随伴性自尊感情が低い者よりも，脅威性の評価が揺れ動くことから，随伴性自尊感情が高い者の方が，自尊感情の増幅や減衰に関わる出来事に敏感に反応していることが示唆された。これらの結果は，Kernis（2003），Zeigler-Hillet al.（2011），Vonk & Smit（2012）といった先行研究の見解を実証する結果となったといえるだろう。影響性の評価に関しても，随伴性自尊感情が高い者の方が，評価に揺れ動きがみられることがわかった。しかし，随伴性自尊感情が高い者は，ポジティブな出来事においてもネガティブな出来事においても，出来事が自身に及ぼす影響を高く認知することがわかっている。これを加味して考えると，随伴性自尊感情が高い者は，出来事の肯定性に関係なく出来事が自身に与える影響を大きく認知するが，同時に，出来事の内容によってその評価が揺れ動きやすいということも示しているといえる。つまり，基準や期待を満たすことで自尊感情を得ている者は，評価的な出来事に敏感であり，基本的に出来事が自身に及ぼす影響を高く評価するが，その評価は出来事の内容によって容易に変化し得るということを意味している。

最後に，対人認知の揺れ動きについて検討する。分析の結果，随伴性自尊感情が高い者と低い者とでは，対人認知の揺れ動き得点に有意な差が認められなかった。つまり，随伴性自尊感情の高さは対人認知の揺れ動きには影響を与えないということが示された。よって，仮説⑤「随伴性自尊感情が高い者は低い者よりも，他者に対する認知的評価が揺れ動く」は支持されなかった。

市村（2011）によると，自尊感情低下後に行われる自尊感情の回復行動は，自尊感情の高さと自尊感情の不安定さという２つの側面の組み合わせによって異なることがわかっている。自尊感情の低下後には，自尊感情が高い者ほど気晴らしを行うが，自尊感情が高くかつ不安定な者は，他者に話を聴いてもらうといった開示行動をとらない。これは，他者から評価されることを防ぐことに繋がると考えられる。また，自尊感情が低く不安定な者は，他者に自分を肯定してもらうなど，他者からの受容を引き起こすような行動をとることも明らかとなっている。ここから，自尊感情の揺れ動きやすさと同時に自尊感情の高さが他者と関係する回復行動の選択へと影響を及ぼしていることがうかがえる。また，Baumeister et al.（1996）では，自尊感情が高くかつ不安定な者が怒りや敵意を感じていることが示されている。よって，基準や期待を満たすことによって自尊感情を得ていて，かつその自尊感情が高い場合においてのみ，他者の評価に揺れ動きがみられる可能性が推測される。そのため，随伴性自尊感情の高さと他者評価の揺れ動きに関しては，自尊感情そのものの高さという要因を追加したうえで，さらなる検討がなされることが望まれる。

まとめと今後の展望

本研究では，我が国において十分な研究がなされていない随伴性自尊感情に関して検討した。これまでは，随伴性自尊感情が高い者は出来事に影響されて自尊感情が揺れ動き，自尊感情が脅威にさらされる場面では抑うつや怒りといった反応を示すとされてきた。そして，本研究において，随伴性自尊感情が高い者は，ネガティブな出来事をより否定的に，かつその脅威性を高く認知することが明らかになり，自尊感情の低下やネガティブ感情の表出にはこのような認知が介在していることがうかがえた。また，随伴性自尊感情が高い者は，ポジティブな出来事をより肯定的に，かつその脅威性を低く認知し，高評価を与えた他者に対してより親しみやすいと評価することも明らかとなった。出来事や他者をポジティブにとらえられるということは，心理的なストレスをより減少させることに繋がるであろうし，他者との関係づくりにおいても良い影響を及ぼすと予想できる。そこで，今後の研究においては，随伴性自尊感情のネガティ

ブな側面だけでなく，ポジティブな側面にも焦点を当てた検討がなされることが望まれる。

また，本研究は，随伴性自尊感情の高さのみに焦点を当てたが，対人認知に関しては，個人が有している自尊感情の高さそのものが影響を与えていることが考えられた。よって，今後は随伴性自尊感情の高さだけでなく，自尊感情の高さをも考慮し，対人認知との関連について検討する必要があると思われる。

加えて，本調査では場面想定法を用いたが，場面を想像した場合と実際にその場面を経験した場合とでは反応が異なる可能性も考えられる。そのため，より現実に即した場面，たとえば，実験室実験などによって同様の結果が得られるのかも検討する価値があると思われる。今後も，より多くの視点から随伴性自尊感情について検討がなされることで，未だに曖昧な随伴性自尊感情という概念が明確なものとなり，その役割および重要性が見出されることとなるだろう。

引用文献

阿部美帆 (2009). 自尊感情の高さおよび変動性の 2 側面と出来事経験との関連　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 18, 118-119.

Baumeister, R. F., Smart, L. ,Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egoism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.

Greenier, L. D., Kernis, M. H., Waschull, S. B., Berry, A. J., Herlocker, C. E., & Abend, T. A. (1999). Indivisual differences in reactivity to daily events : Examining the roles of stability and level of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 185-201.

林文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察　名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247.

林文敏 (1982). 対人認知構造における個人差の測定 (8)—認知者の自己概念および欲求との関連について—　実験社会心理学研究, 22, 1-9.

市村美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の 2 側面と自尊感情低下後の回復行動との関連　心理学研究, 82, 362-369.

池上知子 (1993). 自己感情と他者感情が対人認知過程に及ぼす影響　愛知教育大学研究報告 (教育科学), 42, 95-110.

伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—　教育心理学研究, 54, 222-232.

伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011). 自尊感情の 3 様態—自尊源の随伴性と充足感からの整理—　心理学研究, 81, 560-568.

加藤司 (2001). 対人ストレス過程の検証　教育心理学研究, 49, 295-304.

Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry,* 14, 1-26.

Kernis, M. H. (2006). *Self-esteem issues and answers a sourcebook of current perspectives.* Psychology Press.

中間玲子・小塩真司 (2007). 自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題　福島大学研究年報, 3, 1-10.

根本橘夫 (1973). 対人認知に及ぼすSelf-Esteemの影響 (Ⅱ) 実験社会心理学研究, 13, 31-39.

大橋正夫・林敏文・廣岡秀一 (1983). 暗黙裡の性格観に関する研究 (Ⅱ) —共通尺度報と個別尺度報の比較検討—　名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 30, 1-26

大谷和大・中谷素之 (2011). 学業における自己価値の随伴性が内発的動機づけ低下に及ぼす影響プロセス—状態的自尊感情と失敗場面の感情を媒介として—　パーソナリティ研究, 19, 206-216.

小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情,友人関係のあり方との関連　教育心理学研究, 46, 280-290.

小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響　性格心理学研究, 10, 35-44.

鈴木伸一・坂野雄二 (1998). 認知的評価測定尺度 (CARS) 作成の試み　ヒューマンサイエンスリサーチ, 7, 113-124.

Vonk, R. & Smit, H. (2012). Optimal self-esteem is contingent: Intrinsic versus extrinsic and upward versus downward contingencies. *European Journal of Personality,* 26, 182-193.

Zeigler-Hill, V., Besser, A., King, K. (2011). Contingent self-esteem and anticipated reactions to interpersonal rejection and achievement failure. *Journal of Social and Clinical Psychology,* 30, 1069-1096.

Appendix：本研究で用いた場面

ポジティブな出来事
- 「あなたって面白いね」と言われた
- 「あなたと一緒にいると楽しい」と言われた
- 「あなたといるとなんか安心する」と言われた

ネガティブな出来事
- 「あなたって本当に何も話聞いてないよね」と言われた
- 無視された
- 説明が十分でなかったときに，「あーもういい」と言われた

Abstract

Contingent self-esteem is self-esteem based on the approval of others or on social comparisons. The purpose of this study was to investigate the effects of contingent self-esteem upon the cognitive appraisal both for the positive and negative events and for others. Two hundred and seventeen four university students responded to the situation featured a positive/negative events. The results indicated that students with higher levels of contingent self-esteem perceived the positive events more positively and effectively than those with lower levels of contingent self-esteem. They also perceived the negative events more negatively and effectively than those with low contingent self-esteem. In contrast, the level of contingent self-esteem affected partly on the cognitive appraisal for others appeared on the events. These results suggested that the level of contingent self-esteem affected cognitive approval for events, but not for others.

Key words: contingent self-esteem, cognitive appraisal